

研究所 感覚機能系障害研究部

阿栄娜、酒井奈緒美、森浩一、北條具仁

【背景】成人吃音の非流暢性の第1位は難発（阻止、ブロック）である（小澤ら, 2013）。吃音者の難発は改善されにくく、吃らないように注意して流暢に話そうとすると、却って吃ってしまうことがある（Guitar, 2013）。そこで本研究ではシャドーイングの導入を試みる。シャドーイングとは、聞こえてくる発話に対して、できるだけ早くその発話と同じ発話を口頭で再生する行為であり（Marslen-Wilson W.D., 1975; 玉井, 2005; 門田, 2007）、音声情報の保持と構音運動の並列処理が必要である（門田, 2012）。海外の先行研究では、吃音者はシャドーイング中に吃頻度が減少するとされている（Cherry & Sayers, 1956; Andrews G et al., 1982; Healey HC, 1987）。

【目的】シャドーイング中の難発の頻度が日本人吃音者においても減少するかを検証する。

【方法】日本語を母語とする吃音者15名（男性12名、女性3名、平均年齢27.7歳、範囲18～38歳）を対象にシャドーイング訓練を行った。シャドーイング訓練前後に訓練中と異なる文章で音読課題（音読 pre, post）を実施した。音読およびシャドーイングで使用した各課題文において、総文節中の何文節に難発が現れたか（難発頻度）を算出した。難発の判断基準は『吃音検査法』（小澤ら, 2013）に従い、評定者間の一致率は83%であった。一般に吃音の診断には3%以上の非流暢が基準の一つとされることが多いので、シャドーイング前の音読中の難発の頻度が3%以上であった吃音者7名を「群1」、3%以下であった8名を「群2」と分類した。

【結果】群1の各課題における難発頻度の中央値は、音読 pre : 8.15、シャドーイング : 0.49、音読 post : 5.19であった。一方、群2の中央値はすべての課題において「0」であった。難発頻度が高かった群1は課題間（音読 pre、シャドーイング、音読 post）で有意な差がみられた（Friedman 検定, $p < 0.05$ ）。シャドーイングにおける難発頻度が音読 pre と音読 post より低かった（それぞれ $p = 0.011$ ）が、音読 pre, post の間には有意な差は認められなかった（ $p = 0.58$ ）。

【考察】本実験における参加者のうち、半数近くは音読時の難発の頻度が3%以上であったが、シャドーイング中に1%未満まで減少した。吃音者は騒音下で吃頻度が減少する場合があるため（Bloodstein O. et al. 2008）、シャドーイング中に聞こえてくるモデル音声がかき消すノイズの役割を果たした可能性がある。しかし、かき消すノイズ下での吃頻度の減少には個人差があり（Andrews G et al., 1982）、本研究では全員がシャドーイング中に難発の頻度が減少したことを説明しがたい。さらに、シャドーイング後の音読で、難発の頻度が再び高くなったことから、実験への慣れの効果でもなく、聞きながら言うという課題そのものによる効果であると考えられる。

【まとめ】日本語を母語とする吃音者でも、音読で難発頻度が高い吃音者は、後効果はないものの、シャドーイング中に難発が大幅に減少することが明らかになった。このことから、難発が多い吃音者にとって、シャドーイングは難発の低減を容易に体験できる方法であると言える。